

アムールの風

正統右翼の論理

第9回

田中健之

(黒龍會会長)

第二章

知られざる日本裏面史

日韓併合から敗戦まで

〇すり替えられた日韓合邦第二回

愛国的革命思想・東学

李氏朝鮮末期の韓国で起こった東学党は、キリスト教に基づくヨーロッパ思想ではなく、儒教、仏教をはじめ朝鮮土着の民間信仰などを融合させた新宗教運動で、西学すなわちキリスト教に対抗して、東学と名づけられ、一八六〇年に慶州出身の崔濟愚という人が始めました。それが一般大衆に根を下ろした体制改革運動へと発展し

圧政統治をしており、それに苦しむ人民は大勢いました。

「金の樽の美酒は千人の血 玉盤の佳肴は万姓の膏 燭淚落ちる時 民の涙は落ちる 歌声高き処怨の声高し」という当時詠まれた漢詩によって、その頃の朝鮮で暮らす一般人民のことがよくわかる漢詩です。

朝鮮の中から、李朝ではなくて新しい近代化を目的とした、金玉均や朴泳孝らの独立党(開化党)による革命運動が起きています。そうした朝鮮の歴史的な潮流の中から生じた東学党の乱は、愛国的な朝鮮の革命運動の継承でもあったのです。

—EUと同様の構想だった日韓合邦—

日韓合邦運動を推進した李容九は、朝鮮民衆の民権を重視する観点から、日本の保護国である韓国において、韓国人が日本人と同じ権利を持つためには、日韓が対等に合邦する以外に道はないと考えていました。日本の保護国であった韓国は、到底独立ができるような状態ではありませんでした。

李容九が構想していた日韓合邦とは、「国防」「外交」

ていったのです。

東学では日常的に、「侍天主 造化定 永世不忘 万事知」という十三文字から成る呪文を真心込めて唱えます。修養して靈符を飲めば、天と人が一体となって、現世において神仙になると教えており、単純な現世利益の教えで、東学は大勢の一般大衆に広がりました。

ところで、東学党の乱の中心となった人物は全琫準という人で、内田良平と玄洋社の人たちは、東学党の乱を支援するために、福岡から朝鮮に渡り、天佑使を組織して全琫準と会盟し、その乱に参加しています。玄洋社と東学党の人たちの間には連絡ルートがあり、お互いに信頼関係がありました。

当時の朝鮮を統治していた李朝は、人民に対する酷い

「経済」を日本と連合して行なおうというものでした。つまり政治の連合、政合邦ということでした。

まさしくそれは、今日のEUのような連合です。今日のEUには、経済的な恩恵を蒙ろうと、経済が破綻しているウクライナやアルバニアなどの国々までがEUに加盟しようと躍起になっています。日韓合邦はそれと同じことです。

日韓合邦によって韓国人は、日本人と同じ権利、福祉を持つ権利を有することになるのです。併合は日本による韓国の吸収を意味しています。保護国であった当時の韓国の事情を考えると、それはある意味では日本の植民地と同様であるため、韓国民には福祉も民権もありませんでした。

これに対して、日本政府が考えていたことは日韓の対等な合邦ではなく、韓国の日本への吸収合併だったのです。

—独立をめざした安重根の二発—

ここで朝鮮独立の義士、安重根の話をしします。

安重根は朝鮮独立の志士としてよく知られている人物

ですが、実は日本の明治天皇を尊崇していました。明治維新の際、伊藤博文が孝明天皇を暗殺したものと安重根は思い込んでおり、そのために彼は、伊藤を逆賊だと明言しています。

安重根はとても立派な人物で、千葉十七という看守は、彼の獄中の態度と生き方の姿勢に非常に感銘しています。しかし、安重根が伊藤博文に放った一発は、悲しい哉、逆に日本政府に日韓併合を決定させる運命の一発となってしまいました。

ところで、安重根が撃った弾は、伊藤博文に命中することなく、外れたとも言われています。伊藤博文の検死報告書を見ると、斜め首筋から下に数発の銃弾が抜けています。この銃傷を見ると、ロシアの騎兵銃で伊藤が撃たれたのではないかという説があります。伊藤に随行した外交官の室田義文がそうした手記を残しています。

伊藤博文暗殺は、このように異説があるにも関わらず、それを敢えて検証することなくして、安重根が伊藤博文を暗殺したと決めつけています。彼を伊藤博文暗殺の犯人だということにしてしまえば、日本が韓国を併合するための絶好の理由となります。

彼は自ら「平民」だとして、日韓合邦の真面目を貫いたのです。

李容九は、韓国の国民を救済しようとして日韓合邦運動を行なったわけですが、日本政府によって日韓合邦は日韓併合へとすり替えられ、それによって祖国韓国は、日本の版図として組み込まれて、世界地図上から消滅させる結果を招いてしまい、自分は国を誤ったのだと悔恨します。

李容九は死の間際に、内田良平と杉山茂丸に対して「私たちは馬鹿でしたね。あなたも騙されたのですか。私も騙されたんですね」と失意の心裡を語っています。

李容九は日韓合邦運動の同志である武田範之に対して、「二十万人の人民を日本の最下等民に追い込み、新日本国民として参加させることのできなかった罪も小生にあります」と記した書簡を送っています。

——日韓は併合ではなくて合邦だ——

一方、内田良平はその死に至るまで、日本政府による朝鮮統治に対して、徹底的に朝鮮統治改革運動を断行しています。

李容九は、安重根が伊藤に一発放ったことを聞いて「しまった」と、思わず一言発しました。これで韓国はなくなるのだと彼は考えました。

そこで彼は急いで、日本と韓国はあくまでも平等であるということを主張した、「日韓合邦の建白書」を日本と韓国の両政府に出し、日韓合邦運動のスピードを加速させました。

そのことから李容九は、現在の韓国(朝鮮)史において、「韓国を日本に併合させた売国奴だ」とされてしまいました。李容九は両班出身であったにもかかわらず、死の間際まで、自ら「平民」だと言っていました。

日韓併合によって、それまで韓国の独立を叫び、反日を唱えていた多くの両班たちが一気に豹変、率先して日本から爵位をもらった人がほとんどでした。

彼らは授爵して、日本の伯爵とか侯爵という貴族になりました。李朝政府の高官連中も日韓併合によって、日本の貴族になった人々が大勢いたのです。

そうした両班を横目に李容九は、日本からの授爵を拒否しました。彼は日本からは一切何ももらうことがありませんでした。

杉山茂丸の息子で、幻想文学作家として知られている夢野久作に話した回顧談の中で、内田はまるで遺言のように「朝鮮統治改革をやれ」と述べています。

朝鮮統治改革運動の中からは、黒龍会と共に内田良平が総裁を務める大日本生産党の本部が、宇垣朝鮮総督排撃運動を展開しています。それを受け、同党嘉穂支部員の宮山正一ら四名が、昭和十(一九三五)年五月十七日、朝鮮総督府をダイナマイトで爆破しようとして未遂に終わった「朝鮮統治改革神風隊事件」を起こしています。

ところで、内田良平が朝鮮総督府に対して、「朝鮮人の参政権の獲得」、「朝鮮の国情に適応した立法院の設立」、「朝鮮人に対する文武官任用の開放」、「地方自治の確立」などを強く訴えていました。

朝鮮統治改革運動において、内田良平と旧一進会の会員たちが目的としたことは、「朝鮮の内政独立」だったので。内田はその最期まで、日韓は併合ではなくて合邦だと言いつづけています。

内田良平は、その晩年、病軀をおして明治神宮前の表参道に『日韓合邦記念塔』を建立しました。それは朝鮮の慶州の仏国寺にある多宝塔をモデルにした大きなものです。

塔内には「日韓合邦の功労者」の芳名録を銅板に刻んで収めています。それには、日韓併合条約に調印した李完用首相ら、頭職当局の名前は刻まれていませんでした。なぜならばそれは、日韓併合ではなく、日韓合邦の大義を正すためだったからです。

そのことについて内田は、「我が為政当局に於いても、韓民族の伝統的希望を無視し、単に目前の統治上に便利なることのみを主眼として、諸般の政治を施され、これ実に我が当局者らが、朝鮮人の日韓合邦に期待せし希望を無視し、絶望の境遇に陥らしめた」と断言しています。

『日韓合邦記念塔』の建立は、日韓合邦の大義を明らかにする一方、合邦を併合にすり替えた日本政府に対する内田良平らによる抗議の意思の顕われだったのです。

それに対して朝鮮総督の南次郎は、「何がいまさら日韓合邦なのか」と文句をつけて、『日韓合邦記念塔』建立の中止を要求してきました。しかし内田良平は、「我々が目指したのは日韓合邦だ」と言って、日本政府や朝鮮総督府の圧力に抗し、『日韓合邦記念塔』の建立を断行しました。内田は「日韓は併合ではなく合邦なのだ」ということを、その死に至るまで言い続けていました。

した。そういう運動を内田良平と黒龍会関係者は果敢に行い続けたのです。

——売国奴にされた親日派——

そうした動きの中から出て来た人物が朴春琴です。

彼は朝鮮人として一貫して本名を名乗って、衆議院議員になります。亀戸界限が彼の選挙区でした。

朴春琴の選挙運動は、頭山満をはじめ玄洋社や黒龍会系の人々が応援した結果、彼は見事にトップ当選し、政治家として朝鮮人の地位を守り通しました。彼が政治家を志した動機は、朝鮮人の差別撤廃とその地位向上のためでした。

朴春琴は現在、親日派の売国奴として歴史から葬り去られてしまっていますが、朝鮮人の差別の中から朴春琴は本名で衆議院議員として当選を果たし、朝鮮人の権利を守り、その地位向上に努めた人であった事を忘れてはならず、彼の事蹟をきちんと検証・評価をするべきです。ところで、当時、朝鮮半島に赴任した日本の陸軍の将校たちがいます。

昭和十二年七月二十六日に亡くなった内田良平の跡を継いで、黒龍会の二代目主幹に葛生能久が就任します。葛生は、天佑侠以来の内田と行動を共にしてきた古い同志で、内田の思想を常に書物に著すなどしてきた人物です。

葛生能久体制下の黒龍会では、昭和二十年二月、空襲が激しくなり、紙の配給がままならない中においても、『日韓合邦の真精神——一進会の合邦運動、李完用体験の国際侮辱』と題するパンフレットを発行して、日韓合邦の大義を主張し続けました。

日韓合邦を主張すると、当然、政府が圧力をかけて来ますが、黒龍会の会員は内田や葛生と共に、日本政府の圧力に対して決して屈することはなく、朝鮮統治改革運動をずっと続けて行きます。

あくまでも日本と韓国とを平等な関係に改革すると言って内田良平は、玄洋社の先輩で、孫文らによる中華革命を支援していた末永節の力を借りて、『同光会』という会を結成します。

そこで彼らは、朝鮮の内政の独立運動をします。さらに同光会では、朝鮮人の国会議員を認めるという運動も行い、朝鮮人を日本の国政に参加させようと動いていま

二・二六事件の中心的な人物だった磯部浅一や西田税も朝鮮で勤務しています。軍人として朝鮮を体験した人々が、当時の朝鮮総督府の政治を憤り、朝鮮人差別に対して同情しているのです。

五・一五事件に参加した陸軍士官候補生の篠原市之助は、軍法会議の事実審理において、「日本の大陸発展の礎石たる朝鮮は併合後二十数年、年とともに流離の民、亡国の憾みが増加するが如きは明治大帝の深厚なる大御心にそむいていると思います」と言い、「私どもは先帝陛下の大御心を体し、日韓併合に努力された老志士の心をつくんで朝鮮人のために尽くしてやらなければならぬと思います」と陳述しています。

また同じく五・一五事件に参加した陸軍士官候補生の八木春雄は、事件に参加する前日まで、満洲に戦跡視察旅行に行っており、その帰途に立ち寄った朝鮮各地において、日本の朝鮮統治の矛盾を強く感じていました。

陸軍公判第二回事実審理の中で、八木陸軍士官候補生は、朝鮮全土で抗日思想が浸透している理由として、次の三点を掲げています。

一、朝鮮の併合以来、随分乱暴な政治を施した結果、

非常なる反感を朝鮮人に与えた。

二、朝鮮同胞には、官吏として登用される権利はない。

三、我が内地人の朝鮮同胞、満洲人、中国人に対する軽侮の態度。

そして彼は同席上で、「この偏狭な態度を改めないならば、我が皇道を世界に宣布するということは或いは不可能ではないかとすら考えられるのであります。(略)私は朝鮮を見まして、内地人の朝鮮人に対するより以上の理解を必要とすると思いました」と意見を述べ、「為政者および国民一般が充分覚醒せられんことを希望します」と言っています。

五・一五事件に参加した軍人たちに思想的に大きな影響を与えた人物が、『自治民範』などの著者として知られている民間の制度学者、権藤成卿です。彼は古くから内田良平や武田範之らの同志として黒龍会で活躍した人で、李容九や宋秉峻らと親交を結び、日韓合邦運動に携り、合邦を併合にすり替えた日本政府に強い憤りを抱いていました。

確かに日韓併合によって、日本政府は朝鮮にインフラを建設し、学校や帝国大学も設立するなど、良いことも遊興のために中国出張をしているのがほとんどです。そういう日本のビジネスマンの態度を目にし、貧しい農村から都市部に出稼ぎに来た労働者たちは、日本人に対して気持ちよく思わないどころか侮蔑し、反感さえ抱いています。それが今日の反日思想と結び付いているのです。彼らが言う反日は歴史的な反日というよりも、今日の日本人の態度に対する反日なのです。つまり、今日の反日的な感情が、歴史的な出来事に比喩された反日の表現となっているのです。

そうした心無い日本のビジネスマンたちは、中国に限らず、韓国、フィリピン、タイ、ヴェトナムなど、アジア各国でそうした醜い姿を晒しています。私は、世界の各民族の民心を理解し、尊敬される日本人であることが大事だと思っています。現地の人が一様に言うのは、「日本の商社の人たちは上から目線なんです」ということです。現地の人々のことを日本人は馬鹿にしていると、彼らは感じています。

今は、アジア諸国の近代化がかなり進んでいます。「日本ではこうなんだから、お前らはこうしろ」と、合併企業

しています。しかし、その一方で彼らに対して、見下すような態度があったことは、否定することはできません。アジアの人々に対する日本人の傲慢な態度は、残念ながら今の日本にもあることです。

私の面識がある人物で、ある大手企業でプラントをやっていた人がいますが、その人は外国人を見る時に、常に上から目線で物を言い、傲慢な態度を見せています。「お前は遅れているんだから、俺たちが導いてやる」みたいなことを言い、自分たちがこれをやってあげたのだから有り難いと思え、というような横柄な態度をとっています。

そういう態度の日本人に対して、アジアの国の人たちはものすごく反発するわけです。

また商社員の中にもそういう類の人は少なくありません。ゴルフバッグを背負った姿で中国に出張に行く彼らは、現地に進出した日本企業の接待で昼間はゴルフを楽しみ、夜はカラオケに繰り出します。カラオケというのは女の子を連れ出すバーです。このような無神経な日本企業戦士は、当然の如く中国語を話すことは出来ず、中国事情の勉強すらしていません。彼らは中国視察を名目とした、自分たち

などは、日本のスタイルを現地人たちに押しつけています。大東亜戦争中に、日本政府の官僚が主導した大東亜共栄圏も、そういう日本を基準にした上からの目線で物を言う部分があったからこそ、反発を招かれています。官僚の主導による大東亜共栄圏と違って、在野の志士たちが、アジアの同胞たちに対する共感から行動した大アジア主義は、虐げられた同じアジア民衆の目線に立ったものでした。欧米列強諸国の植民地として、収奪されたアジアに同情した彼らは、同じ釜の飯をアジアの民衆と食いながら、共に涙を流し、共に汗をかき、共に血を流して、共にアジア独立のために立ち上がったのです。

それが玄洋社や黒龍会の先覚志士が実践した大アジア主義です。本来、日本および日本人がその原点に立った上で、アジアの人々と共に歩むべきだと私は痛感しています。



田中 健之 たなか たけゆき

歴史作家、維新運動家、昭和38年11月5日生まれ。福岡市出身。玄洋社初代社長田原太郎の曾孫で、黒龍会を創立した内田良平の血脈を継承する親族。拓殖大学日本文化研究所近代研究センター委員研究員を経て、現在、ロシア科学アカデミー東洋学研究所及モスクワ国立教育大学外国語学部客員研究員、日露善隣協会会長。2008年に黒龍会を再興し会長に就任。主な著書に「満洲に記される人々」、「昭和維新」、「北朝鮮の終焉」、「実は日本人が大好きなロシア人」(福井中津市)など。中央公論「正論」歴史群像などの論議誌に多数執筆。